

(3) 全国の重症心身障害児施設におけるヒヤリハットの実態と事故防止に向けた取り組み

川崎医療福祉大学大学院 保健看護学専攻 博士後期課程 飯田加寿子

川崎医療福祉大学 保健看護学科 鈴井江三子

【要旨】

重症心身障害児施設(以下、重心施設とする)は、病院と福祉施設の機能が併存する児童福祉施設であるが、満18歳以上でも入所が可能のため、幅広い年齢層が入所している。1980年代後半からは、新生児医療や救命救急医療の進歩により、より専門性の高い医療的処置とケアが必要とされるようになった。その結果、多様な事故が増加する傾向にあると推測されている。

そこで、本研究では日本における重心施設の事故の実態と事故防止に向けた取り組みの現状、及び実際に起こっているインシデント・アクシデントの発生状況を調査した。

調査対象施設及び調査対象者は、全国重心施設115施設の施設長とした。調査方法は、郵送法による構成的質問紙票を用いて無記名自記式アンケート調査を行った。

その結果、70施設(61%)の回収率を得た。施設

の概要は約9割が終身型施設であった。入所者の特徴としては、乳幼児から高齢の幅広い年齢層で、動くとされる重症心身障害児者が多くを占めた。インシデント・アクシデントの発生状況では、「内服の投薬ミス」が最も多かった。事故の内容は、医療的ケアのみならず、「転倒・転落」など生活援助に関することも多くみられ、入所者以外の「短期利用者」や「通園利用者」も被災している傾向があった。

事故防止に向けた取り組みでは、事故防止対策に向けた組織の構築はされていたが、日常業務に直結した事故防止対策としては稼働しておらず、職員の行動との乖離があった。業務においては医療的ケアと生活援助は、さまざまな職種が行い、業務区分が明確になされていなかった。つまり、重心施設では、入所者の多様性に合致させた事故防止対策が不十分であり、専門性にあった業務内容の明確化もできていないことが、事故の誘因になっていることが明らかになった。